

草筆木筆で描く不思議のらかんたち

# 草画帖 30



松  
林  
号



秋草号です。

表紙はムラサキエノコロ。

号名はコバノギボウシ筆。

写真はヤマラッキョウです。

十月や古墳の空をこふのとり



アキノタムラソウ筆  
秋



アキノタムラソウ筆。名所ならずとも、秋はそこらにいっぱい。



ホトトギス筆。秋のうららの、うららかな笑い。



ヤブガラシ筆。  
ふるさとの貧乏葛熟しをり



ツルリンドウ筆。カリカリカリと夜長を刻むような線。

## 月下美人

——山之口獺の生誕日に

獺さん

一夜の

思弁が開くように

あなたが愛した

(あなたが居ない) 地球の夜に

花が

神秘がひらく



セネキオ

——パウル・クレーの絵に

あの夏の  
清らかな少女  
まんまるい表情で  
月も地球も  
くらがりに浮かぶ  
十月が終れば  
もうみんな  
ぼろを噴いて  
寒く  
老いた  
旅に出る



クマツヅラ筆。空気は澄んで、空は高く、心ひろびろ…



ルコウソウ筆。白花。  
風に靡いて、風に乗って、思いは遠くまで飛んでいく。



マンジュシャゲ筆。曼珠沙華髪の寒山。  
「心月自精明 万象何能比」寒山詩



マンジュシャゲ筆。曼珠沙華髪の拾得。  
「為當空是夢 為復夢是空」拾得詩



ヤマラッキョウ筆。  
十月や野は黄昏のがらんどう

## 草話

愛用の筆があつた。蕪村や玉堂の絵に魅せられて、水墨画に興味を持ち始めた頃に、ある古道具屋で見つけた筆。「酔月」と銘のある麴毛中心の硬い筆だつた。

硯はその後でやつてきた。ある人が自分の使っていた硯を譲つてくれた。何丁かの墨と画仙紙とを付けて。文房四宝の三つまで用意してもらつて、こちらにあつたのは筆一本だけ。若い頃からお世話になつた人で、彼がいなくなつたら墨絵はもつと遠回りをしていただろう。

\*

「酔月」はたくさん作品を生んでくれた。大きめの絵はほとんどこの筆。それとは別に小さなふうらを描くのにもう一本愛用の小筆があつた。まだ試作品だというのを手に入れて重宝したが、正式発売の際には全く別物になつていた。

ある日「酔月」を洗っている最中に腰が碎けてばらばらになつた。ほどなく小筆の命毛も磨り切れた。ショックは大きく、他の事情も重なつて絵を描くことはしばらく停滞した。

そうした中で草筆との邂逅。いつしかどの草木でも描けるようになって、風画は草画となり、風羅は草羅となつて復活した。

十六夜の草の一つを筆にして



ヌマタバ

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第30号 2020年10月21日 泉井小太郎編集 六角文庫発行

〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008